

大学はまだ、学生たちにとって夏休みである。通常の授業がないので、教員にとっては自分の研究を進められるチャンスだが、9月ともなると、会議や研究会が増え、後学期の授業も気になり始める。

私は経済学史と制度経済学を専門分野としている。「経済学史が専門だ」というと、しばしば経済史と混同されるが、同じではない。経済の「考え方」の歴史を扱うのが、経済学史である。

## 『福祉国家を越えて』を再読する

向と密接にかかわるので、経済史だけでなく政治史なども関係が深い。

経済学史で私がとくに研究してきたのは、スウェーデンの経済学者ケンナー・ミウルダールの学説である。以前にこの欄で、1930年代の彼の少子化論議と福祉論について紹介したことがあったが、今回は続きとして、60年の彼の著書『福祉国家を越えて』に書かれた「福祉世界」という議論を紹介しよう。

福祉は人的資本への投資である、と30年代にミウルダールは主張し、そのアイデアは北欧的な普遍主義的福祉政策の形成に結びつい

「限界」を展開したことにある。彼は福祉国家における行き過ぎた官僚主義や中央集権化を危惧するようになり、望ましい「次の段階」として、市民の自律性や分権化を志向した。それはいわば「福祉社会」の展望であった。また彼は、福祉国家は本質的に国民主義的であり、それは国内において

は国民的統合という好ましい効果をもつけれども、対外的には国際的分裂を生じさせることになる」と論じ、福祉国家は現状に満足してはならず、「福祉世界」へと越えられなければならない」と説いた。

物事がうまくいっているように見えるときに、本当にこれでよいのかと自問することは難しい。しかし、彼はそれをした。「福祉世界」とは、「富国と貧国の双方の側で国際的結束が増大すること、およびそれを基礎にして、世界的規模で機会を均等化させようとする国際協力へ向かう趨勢（すうせい）が上昇すること」であった。ミウルダールの問題提起は、国際的な経済格差、移民や難民の問題に直面する現代において、なおいっそう重要である。

この夏休み、私の「宿題」は『福祉世界―福祉国家は越えられるか』という単書の準備であった。10月に刊行される予定となっているので、手に取っていただければ幸いである。

# 「国家」から「世界」への

## 問題提起

経済学は経済思想、経済理論、経済政策からなるといつてよいだろうが、それらの歴史を考察する。もちろん、そうした経済学史は、現実の経済社会や政治の動



名古屋市立大学大学院  
経済学研究科教授

藤田 菜々子

ふじた・ななこ 経済学史、制度経済学。名古屋大学大学院経済学研究科博士後期課程修了。博士（経済学）。1977年生まれ。

